都道府県別賞一等

百年後に残したい「家族の笑顔」

神奈川県　横浜市立樽町中学校　二学年

背黒　五希

百年後、ひ孫が古い作文帳をめくりながら、「こんなことを考えていたんだ」と笑ってくれたらいい。そんな未来を想像したとき、私は『百年後まで残したいものは何だろう』と考えた。お金でも物でもない。私が残したいのは、家族の笑顔である。

最近よく耳にする「人生百年時代」という言葉。実際、八十五歳を過ぎた祖母は、今でも家事をこなし、友人と旅行へ出かけるほど元気だ。長生きは特別なことではないと感じる一方で、長く生きるということは、病気やケガ、お金の不安と向き合う時間も長くなるということだ。そのことを私が強く意識したのは、祖母が股関節の手術を受けたときだった。

手術の前、祖母は歩くことさえつらそうで、家族の会話もどこか沈んでいた。そんな中で母は、「生命保険の入院給付金があるから、治療のことを一番に考えられるよ」と話した。当時の私は、その言葉の重みを深くは理解できなかった。ただ、家族がお金の心配に振り回されることなく、祖母の体調と向き合っていた姿は、今でも心に残っている。

手術は無事に終わったが、そこで終わりではなかった。祖母は毎日リハビリに励んだ。最初はゆっくりとしか動かせなかった足が、少しずつしっかりしていく様子を見て、努力は人を前へ進ませるのだと感じた。そして数カ月後、「友達と旅行に行ってくるね」と出かけていった祖母を見て、家族みんなの表情がふっとやわらいだ。帰宅した祖母が旅先の写真を見せながら話す姿は、手術前とは別人のように生き生きとしていた。

そのとき気づいた。生命保険は病気を治すものではない。しかし、治療を受ける人や支える家族が、お金の不安に追われず大切な選択に集中できるよう、そばで支える存在なのだと。あの数カ月間、家計だけでなく、家族の心にゆとりを与えていたのは、きっとこの生命保険だったのだと思う。

生命保険について調べるまでは、「もしものためのお金」という程度のイメージしか持っていなかった。しかし今では、病気や事故という予想できない出来事に備え、家族がこれまで通りの暮らしを取り戻すための土台なのだと感じている。「大丈夫、一緒に乗り越えよう」と支えてくれる、見えない約束のようなものだ。

私はまだ中学生で、自分で生命保険を選ぶ立場ではない。しかし数年もすれば、大人として人生設計を考える時期がやってくる。そのときは、保険料や保障額

だけで判断するのではなく、『この生命保険は大切な人の笑顔を守れるだろうか』という視点を忘れたくない。

百年後に残したいのは、お金や物ではなく、困ったときに支え合える家族の安心である。祖母が笑顔で旅行から帰ってきたあの日、家族全員の顔がほころんだことを、私はきっと忘れない。その笑顔を支えた見えない力があったことを胸に刻み、いつか私も、自分の家族が安心して笑い合える未来をつくっていきたい。そしていつか、この笑顔が次の世代へと受け継がれていくことを願っている。